

向学館通信

2010・2・25

期末テストが終わると新学年の準備です。

学習がおこなわれている人、どこかの単元をやり直したいという人、基礎固めしたい人は、期末テストが終わってから4月初めまでが絶好のチャンス。この時期に力をつけよう。

この時期に頑張れば、新学期は上昇気流に乗れる。

いま中3生は公立高校受験のため、必死に勉強中です。

勉強方法で気づいたこと。成果の上がないやり方。

受験勉強の最後の追い込みにかかって、あと1カ月あるからどういう勉強をする、あと1週間になるとどういふ勉強に重点を置く、といったことを一人一人について考えて指導しています。その人の弱点を克服したり、忘れた基礎的なことを思い出させたり、など、人によって重点が異なります。勉強科目も様々です。ところが、こうした指導をいかくぐって、別のことをしたがる人がいます。とくに、成果の上がない人のケースを二つ紹介します。

一つは、いろんな学校の過去問や、**自分のレベルを超えた問題集をやりたがる**というケースです。これは、一見、自分を向上させる、よい勉強方法のように見えますが、人によっては全く成果がないのです。なぜかという、こうした人たちのやり方をみると、自分の力量を引き上げるための勉強というより、自分を安心させるため（気休め）の勉強といったほうが当たっているようです。たとえば、数学の二次関数の問題がわからない、あるいは、理科の電流・電圧の計算がわからない、あるいは、社会の「地方自治」のところわからない、など、たくさんの「わからない」が出てきます。本気でわかろうとするなら、教科書なり参考書なりを使って、その単元の基礎的なことからきちんとやれば、よくわかって納得できるはずですが、こうした人たちは、いくら私たちが言っても、参考書や教科書などを開こうとしません。問題集や過去問の解答をみて、それを写してわかったことにしています。実際は、やらないのと同じなのです。もちろん、実力は向上しません。

もう一つのタイプ。これは、**覚える努力をしたがらない**、というものです。極端な例では、英語の「復習プリント」をやって、間違えたところは繰り返し同じ問題をやらせるのですが、4回も5回も同じ単語のつくりや熟語を間違えるなどというケースがあります。問題を解くことには熱心ですが、間違ったところを自覚して二度と間違えないようにするというプロセスがないようです。数学は、問題を解くことが実力を高めますが、他の学科は概して、「問題を解く」というよりは「覚える工夫」をどれだけしたかによって成果が違ってきます。理科や社会、国語の漢字や語彙なども、覚えるための時間と努力がかかせません。これは、数学の「問題を解く」という能力の使い方とは、かなり別の能力です。数学は、それなりに自分の頭で『考える』わけですが、他の科目は、知っているかどうか重要で、知らなければ考える余地もありません。だから、これらの科目は、数学とは違う勉強の仕方が必要です。ところが、数学と同じように「問題を解く」という感覚でやりたがるのです。「知って（理解して）覚える」というプロセスをもっと重視させたいと思っています。

中1、中2生は、定期テスト対策です

当塾では、定期テストの2週間くらい前から、対策として、プリントや過去問を生徒にわたしています。それらをきちんとやれば、高得点がとれる質と量の問題です。だから、この時期は、家でどれだけ、問題をこなすかが勝負です。とても塾だけでこなせる量ではありません。家庭での学習時間が少ない人は、わたしたちプリントの半分もできないはずですが、こうしたことがないようにしてください。公立高校の入試では、当日の入試とはほぼ同じウエイトで内申点が評価されます。内申点が低いと、その分、本番のテストでは高得点が必要です。だから、定期テストは、大事なのです。

新中3生（内部進学を除く）は、模擬テストを開始します

学校のテストだけでは、実力はわかりません。だから、高校受験のための実力測定を専門の模擬テスト会社のもを受けていただいています。当塾では「大阪進研」の「Vもし」を実施しています。これは関西一円で実施されていて、私学などの入試では、ひとつの有力な参考資料となっています。模擬テストはそれまでに習った全範囲から出題されますので、本当の力がわかります。

テストは塾で行います。3月末～4月初めに第一回を行い、12月まで合計6回行います。中3生は、原則として全員毎回受験していただき、入試対策の資料とします。

該当者には、別にくわしくお知らせします。